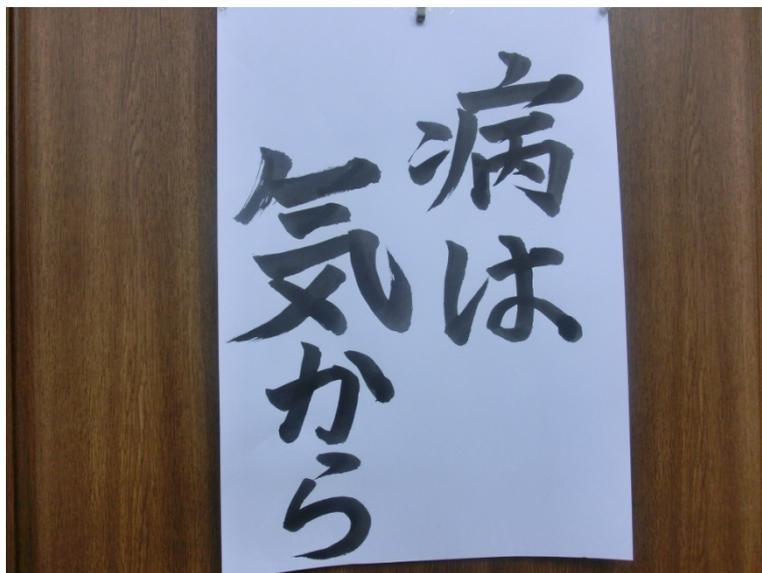


## 闘病よりも「問う病」



毎年恒例の24時間テレビ。

今年はちらっと見ただけですけどね、  
でも、そのちらっと見た内容に違和感を覚えました。

大腸がんを患った男性と家族の機微を追跡取材した内容だったのですが  
さかんに

「がんと闘う！」「がんに負けない！」

「この～につくきがんめっ！」「がんの野郎！！」

がんに罵声を浴びせながら、病気と闘っていたようでした。

さて読者のみなさん、医者から「がん」と診断されたとしたら、どうします？  
この男性のように、がんを心底憎みますか？

がんを撲滅するために、手術で切り取り、放射線で焼き殺し、抗がん剤で抹殺しようとするのが今の医学の「常識」ですから、憎むのも無理ありません。

現に私たちは病人を見舞った時、こう声をかけます。

「病気に負けないでください！」

「一緒に病気と闘いましょう！」

治るか、治らないか？

勝つか、負けるか？

生きるか、死ぬか？

まるで  
病人が戦地に「出征」するかのよう...

激励の色紙、千羽鶴、お守りなど「必勝祈願」の品々が集められ...

さながら治療が 勝敗を賭けた「戦争」のよう...

病気を治すためには

「闘う」ことが最善であり、それが絶対の方策なのでしょうか？

手術、抗がん剤、放射線の三大がん撲滅治療が無意味だとは申しません。  
それで実際、「勝利した人」もいらっしやいますから。

でももし、それで闘いに負けたとしたら...  
そこに残るものは、いったい何なのか？  
「負けたけど、全力で闘った！」という爽快感？  
それとも、「残念無念」の悔しさ？

「闘う」ことは、「相手が悪い、自分は正しい」という観念がそこにあります。  
戦争も同じ。相手国が悪くて、自国は正しい。だから正義のために闘う！  
戦時中の「鬼畜米英」の言葉どおりです。

「戦争と闘病」　すべて一緒くたにはできませんが、本質は同じ。

「闘う」だけの姿勢では、相手の悪ばかりに目が向いて、がんを患った  
「自分の悪」に目が行かなくなります。

つまりこうした考えになりやすい。  
「がんは悪い、自分は悪くない！」

「自分が悪かった...」  
闘う人にとっては、それは反省ではなく「負けた」ということなのでしょう。

『問う病』

「なぜ自分は病気になったのだろう？」

自分に問いかける。

病気をきっかけに、これまでの自分の生き方を問う。

答えは必ず、「自分の中」にあります。

その答えが、唯一無二の良薬となります。

「自分を救えるのは、自分だけ」　言われる所以です。

# 太田東西ブログ

ほぼ毎日更新中！ 薬局ホームページからご覧いただけます。

## 「母子」レスリング

2012.8.9

ロンドンオリンピック、女子レスリングで金メダル2つ！！  
サッカー、卓球、バレーボールといい「女子サマサマ」ですね。  
政治も一回、女性にやってもらったらどうですかね？  
やっぱり、産みの苦しみを知っている女性が、男を産み出す女性が  
男よりも強くて優秀なのです。  
権威にしがみつくと、爺さんたちはもういいよ...

昨夜、レスリングを観戦していたら、うちの2人がレスリングやりだしましてね...



うちの嫁さん、腕力は人並以上、ドライバー200近く飛ばすんですが  
さすがに18歳男子には完敗...



勝負あり！



愛犬のレフリーが敗者を慰めていました(涙)